

発達障害のある生徒に対するコミュニケーション行動の指導
撮影回覧言語行動によるコミュニケーション・モード拡大の検討

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
岡 綾子

研究の目的 サイン言語，ジェスチャー等によるコミュニケーション行動は多数表出するが，聞き手に内容が伝わりにくい発達障害，コミュニケーション障害のある生徒を対象にコミュニケーション行動の指導を実施した。研究 1 では，日常生活場面において対象生徒の撮影回覧言語行動によるコミュニケーション・モードの増加が形成されるか検証し，研究 2 では，構造化された実験場面においてコミュニケーション・モード変換のパターンを明らかにできるか検証を行った。

場面 研究 1 は，日常生活場面における対象生徒のコミュニケーション行動の機会を利用して実施した。研究 2 は，個別学習の時間に実施した。

介入 研究 1 は，デジタルカメラを自分で操作して自由撮影を行い，撮影した画像を筆者に見せるように口頭で指示した。撮影回覧言語行動の指導は，「～の写真を撮ってきて先生に見せてください」と口頭で対象者に指示した。研究 2 の撮影回覧言語行動の指導は，対象生徒にサイン言語の指導をしている担任が，3 か所の指定の場所について「 に行っ て，そこにあるものを見て来て教えて，」と言語指示をした。指定の場所にはアセスメントされた既知・未知の物をどちらか 1 つ，毎回ランダムに配置した。対象者が「わからない」と表出した場合や、担任が対象生徒の報告言語行動に対して「わからない」と表出した際には対象物を撮影してその写真を見せるように指導した。研究 2 のプローブは，1 セッション毎に聞き手を対象生徒にサイン言語の指導をしている担任とサイン言語の訓練を受けていない担任で交代した。3 問の言語指示の内容と対象生徒の活動内容は撮影回覧言語行動の指導と同一であった。聞き手は撮影回覧言語行動が一番に見られた時には「これ何？」と再質問した。サインやジェスチャーが理解できない時は首を傾げた。

標的行動 研究 1 は，対象生徒の自由撮影行動と撮影回覧言語行動，コミュニケーション行動，対象生徒の「諦めポーズ」の生起を測定した。研究 2 は，対象生徒が担任に行った報告言語行動の内容を分析した。

結果 研究 1 では，対象生徒の自由撮影行動と撮影回覧言語行動が形成され，指導終了後も維持された。対象生徒のコミュニケーション行動に撮影回覧言語行動が含まれる場合には，コミュニケーション・モード数，言語行動の数が増えた。更に，対象生徒の自由撮影行動と撮影回覧言語行動が維持され，一度表出した情報が聞き手に通じないと違うコミュニケーション・モードに変えて再度表出するようになると，対象生徒の「諦めポーズ」は見られなくなった。この結果を客観的に分析するために行った研究 2 では，対象生徒の撮影回覧言語行動が既知・未知の選択のみならず，聞き手によって強化されるコミュニケーション・モードの拡大が認められた。よって，研究 1 における撮影回覧言語行動の指導は，対象生徒のコミュニケーション行動の拡大に有効であったと推察される。